

## 韓国中央大学校赤十字看護大学との交流における学生の学び：OJOスキンリハビリテーションセンター訪問、シミュレーション授業参加を通して

著者	益満 智美, 石橋 絵理, 伊藤 成美, 齊藤 史, 島田 和佳, 布施 夢紀, 松垣 萌々, 清水 佐智子
雑誌名	鹿児島大学医学部保健学科紀要
巻	27
号	1
ページ	79-85
発行年	2017-03-31
別言語のタイトル	?Report on a student exchange trip to OJO (Oh junk ok) Skin Rehabilitation Center and attendance of a nursing simulation class at Red Cross College of Nursing at Chung-Ang University in Korea.
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/00029575">http://hdl.handle.net/10232/00029575</a>

## 韓国中央大学校赤十字看護大学との交流における学生の学び

### — OJO スキンリハビリテーションセンター訪問, シミュレーション授業参加を通して —

益満智美<sup>1)</sup>, 石橋絵理<sup>1)</sup>, 伊藤成美<sup>1)</sup>, 斉藤史<sup>1)</sup>,  
島田和佳<sup>1)</sup>, 布施夢紀<sup>1)</sup>, 松垣萌々<sup>1)</sup>, 清水佐智子<sup>1)</sup>

**要旨** 鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻の学生6名が、韓国中央大学校赤十字看護大学での第4回学生交流プログラムに参加した。研修期間中、本学の学生は、実際の保健医療施設の見学や韓国の看護学生や教員と交流を図ることを通して、看護の専門性を学んだ。今回の6日間の研修の中で、学生にとって印象が深かったスキンリハビリテーションセンターの訪問と大学でのシミュレーション授業への参加について報告する。このプログラムに参加することにより学生は、世界における看護の重要性について洞察することができたと考える。

**キーワード:** 韓国, 学生交流, シミュレーション教育, スキンリハビリテーション

#### 緒言

本学では、国際社会で活躍できる人材育成の一環として、「学生海外研修支援事業」が実施されている。看護学専攻では平成23年度よりこの事業の支援を受けて、韓国での海外研修を行ってきた。訪問先である韓国中央大学校赤十字看護大学 (Red Cross College of Nursing, Chung-Ang University : 以下 CAU と略す) と本学医学部は、平成24年に部局間の学術交流協定を締結し、その後も交流を重ねている<sup>1) 2)</sup>。

平成28年9月4日から9日までの6日間、前述の助成を得て、看護学専攻学部3年生6名がCAUを拠点とした海外研修を行い、教員2名が同行した。

今回の研修目的は、海外の緩和ケアを主とする医療・看護および教育の現状と多様性の理解、母国語以外の言語でディスカッションする力を身につけることであった。韓国の教員の配慮により、緩和ケア関連の施設に加え、CAU病院、地域の保健福祉施設および、看護師が開業して皮膚のケアを行うスキンリハビリテーションセンターの見学、さらにCAUの授業や実習にも参加することができた。今回、緩和ケアに関連した内容を除いた研修のうち特に学生の印象が深かったOJO (開設者であるJung Ok Oh氏の頭文字を採用したもの) スキンリハビリテーションセンターとCAUでのシミュレーション授

業について、その内容と研修の成果を報告する。

#### 1. 研修の事前準備

看護学専攻3年生の「緩和ケア論」の講義前に研修の説明を行い、参加者を募った。参加希望者には参加の動機、韓国で体験したいことをA4の用紙に記載してもらった。名前を隠した状態にしたレポートを、教員2名で各々に熟読し6名の学生を選抜した。学生は、韓国において本学を紹介する機会を得たため、パワーポイントを用いた英語でのプレゼンテーションの作成を行った。その他、韓国語や見学施設の学習など、学生が主体的に準備を進めた。教員は学生の自主性を尊重し、教員主導ではなく学生の希望や意見を重視、確認しながら準備を支援した。

#### 2. 研修の実際

研修は表1の内容で実施された。今回報告するOJOスキンリハビリテーションセンター見学は3日目の午後、シミュレーション授業と技術練習への参加は4日目に行われた。

##### 1) OJO スキンリハビリテーションセンター

###### (1) 施設の概要

OJO スキンリハビリテーションセンター<sup>3)</sup>は、メディ

<sup>1)</sup>鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻

連絡先: 益満智美

〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1

Tel/Fax : 099-275-6760

E-mail: t-masu@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

表1 2016年中央大学校赤十字看護大学—鹿児島大学医学部学生交流プログラム

2016 The 4th. CAU-KU Student Exchange Program (September 4~September 9)			
Day	Date	Time	Events
Day 1	Sep. 4 (Sun)	~17:55	Arrive at the Incheon Int'l airport (Flight No. KE0786, time 17:30) Move to the CAU Guest house
		~20:30	Guest house Check-in (Blue Mir Hall)
Day 2	Sep. 5 (Mon)	09:30~11:00	・ Visit to the CAU Hospital - Welcome remarks (Hospital President, Dr. Seong Deok Kim)
		11:00~11:30	・ Red Cross College of Nursing Facility tour (BULD 103 & 102 7th Fl.)
		11:30~14:00	・ Greetings (BULD 102 11Fl. University Club room #3) - Welcome remarks (Vice President for Nursing, Dr. Kap-chul Cho) ・ Introduce to CAU (The Office of International Affairs) ・ Introduce to Red Cross College of Nursing, CAU and orientation for exchange program ・ Welcome Lunch (Salad Buffet)
		14:00~15:00	Move to the Public Health Center
		15:00~17:00	・ Mapo-gu Public Health Center (Director: MD. Sang Chul Oh) ( <a href="http://health.mapo.go.kr/foreign/health_japan/index.jsp">http://health.mapo.go.kr/foreign/health_japan/index.jsp</a> ) ・ Mapo-gu Community Service Center
		17:00~18:00	Back to the CAU campus
Day 3	Sep. 6 (Tue)	09:00~9:30	Move to the Seoul St. Mary's Hospital
		10:00~11:00	・ Seoul St. Mary's Hospital Hospice & Palliative Care Center tour ( <a href="http://www.cmcungmo.or.kr/global/eng/front">http://www.cmcungmo.or.kr/global/eng/front</a> )
		11:00~12:00	・ Meeting with director of the Research Center for Hospice, College of Nursing, The Catholic University of Korea (Dr. Jin-Sun Yong (Sr.))
		12:00~15:00	Free time at the Central City near St. Mary's Hospital
		15:00~16:00	Move to OJO Skin Rehab Center
		16:00~17:30	・ Visit OJO Skin Rehabilitation Center (Director: Jung Ok OH) ( <a href="http://ojo0806.winko.net/base/eng/">http://ojo0806.winko.net/base/eng/</a> )
		17:30~18:00	Back to CAU campus
Day 4	Sep. 7 (Wed)	09:00~09:30	Meet at BULD 102 Lobby and move to the CAU Hospital
		09:30~12:00	・ CAU Hospital tour and practice with CAU nursing students
		11:00~13:00	・ Professors: Lunch with faculty (invited by Dr. Young-Hee Yom)
		12:00~13:00	・ Students: Lunch at the CAU hospital cafeteria
		13:00~15:00	・ Students: Practice with CAU nursing students
		13:00~14:00	・ Professors: Meeting with CAU faculty at BULD 102, Debriefing Room #1 (Nursing science research institute, Dr. Jang)
Day 5	Sep. 8 (Thur)	16:00~17:50	・ Attend Nursing Simulation Class (Integrated Nursing Competence Assessment, BULD 102, Fl. nursing Lab.)
		18:00 ~	Students: Free time with Buddy
Day 6	Sep. 9 (Fri)	09:00~17:00	<b>Free time (City tour)</b>
		17:30~19:30	Farewell Dinner at University Club (BULD 102 11th Fl. University Club room #2)
		11:00~	Depart for Airport (Flight No. KE0785, Time 9:20)

カルスキンリハビリテーションを行う施設である。スキンリハビリテーションとは、圧力をかけない特殊な手技で皮膚の再生を促すもので、火傷や外科的手術等で傷や瘢痕ができた患者に対して、皮膚を正常な状態に戻す為のケアである。また痛みやかゆみ、色素沈着を軽減しリンパや血液の循環を改善することができる。治療内容としては、スキンリハビリマッサージ、リンパマッサージ、皮膚の伸縮性回復、アロマ療法などがあり独自のスキンケア用品も開発している。施設見学のあと、開設者の Jung Ok Oh 氏 (以下、Oh 氏とする) からスライドを用いた説明があり、その後、質疑応答の時間を得た。

このセンターは、看護師である Oh 氏が開設した施設であり、Oh 氏はメディカルエステティックを日本で学び、帰国後、独自の手技やオイルを研究開発し、現在の

メディカルスキンリハビリテーションを確立した。Oh 氏は韓国におけるスキンリハビリテーションの第一人者として活躍している。

患者の年齢は幅広いが、0~3歳児が最も多く、最高齢は78歳である。顔面などに火傷を負った患者も多い。日本ではなじみが少ない軍事訓練等で負傷した軍人も多く、国との協力体制のもとで皮膚ケアを行っている。

ケアは相談から再発の予防まで一貫しており、1回の治療は40分程度であるが、その期間は6ヶ月以上に及ぶこともある。治療費はオイルなどのケア用品を含めると高額となるが、個々の生活背景や経済状況などを考慮しながら来院回数やケア方法を患者とともに相談しながら進めている。遠方から来院する患者も多く、自宅でも継続してケアが行えるように指導を行っている。皮膚への

直接的なケアだけでなく栄養指導，全身のサポートにも配慮しているのが特徴的であった。

説明後に質疑応答が行われた。「顔面などに大きな瘢痕が残る患者は，心にも傷を抱えていることが考えられるが，その精神面のケアはどのように行っているのか」という問いに対し Oh 氏は，「我慢することである。とてもつらい」と述べた。Oh 氏は患者とのコミュニケーションを大切にしているが，多くの患者は当初，自分自身のことを語りたがらないという。一般に看護師は，傷の原因を把握したいと思うものである。しかし，顔面などに傷を負い，外見が変化した患者は相手の顔を見て話すことや，自ら悩みを打ち明けることが少ないとのことだった。Oh 氏は，原因を知りたい，気持ちを知らりたいと思いつつも，患者の気持ちを無理にこじ開けることはせず，語られないつらさにも寄り添いながらじっと待つと話した。待つことはとてもつらく，多大な忍耐力が必要であるが，それも重要な看護援助の一つであると説明があった。傷の改善とともにケアにより心も癒されるためか，患者は苦悩に満ちた受傷経緯を話してくれるようになるが，自ら話してくれるまでには数か月を要する場合もあるとのことだった。

## (2) 施設見学における学生の学び

学生が最も印象深く感じた内容は，Oh 氏が実践している患者への精神的なケアであった。学生は，黙って患者のそばに続けることや，つらさにも寄り添うことが重要な看護であることを理解した。看護の奥深さや看護が無限の可能性を秘めたものであることを実感として得ることができていた。国は異なっても看護の根底にあるケアリングの考えは共通であることを強く認識した体験であった。また，Oh 氏がデータを丁寧に収集し，科学的な視点を持って実践と評価を行っている姿勢に触れたことで学生は，根拠を明確にしてケアを行うことの重要性，研究的な取り組みにより看護の効果を明示できることを感じていた。



写真1 OJO skin rehabilitation center

さらに，一人の韓国の看護師が日本で学んだことを基に独自の技術を生み出し，開業して自律的に働いている姿にも感銘を受けていた。日本で，その基となる技術や学べる環境が日本にあることや看護の独自性についても改めて気づくことができていた。

## 2) Center for simulation Practice in Nursing でのシミュレーション授業への参加

### (1) 施設の概要

スプリングセンターは臨地での実践にそった演習を行うことができる設備が整った施設で「Excellence & Pride in Nursing」を理念として掲げている。大学内の一つのビルのワンフロア全体がセンターとなっており，シミュレーションの部屋が4つ，技術練習ができる複数の演習室，施設管理を行う事務室や物品管理のための部屋が複数設置されている。

CAU は2つの学校が合併したため，1学年の学生が300名と多い。技術練習が効果的に実施できるために，複数の教員が同じ授業を担当しており，1名の教員が看護技術の講義を担当する学生は6～7名であった。シミュレーションの施設では，在宅，産科，ICU，一般病棟の演習が可能で，病院の設備と同等の物品が整えられている。患者モデル人形は，瞳孔の縮小や散大，脈の強弱，呼吸音の設定など種々の設定を行うことが可能なものが導入されていた。



写真2 スプリングセンター入口

### (2) 本学学生のシミュレーション授業参加の実際

本学の学生6名は2名ずつに分かれてシミュレーション授業の見学，演習の授業参加を行った。シミュレーションの授業では，看護4年生の訪問看護のテストが行われていた。韓国学生3名が1グループとなり，患者を訪問する（シミュレーション室に入室する）前にくじを引き，看護師役2名，家族役1名が決められた。家族役は先に

入室し、患者であるモデル人形のそばで待機していた。看護師役の学生2名は患者の自宅（シミュレーション室）を訪問し、状態観察、ケアの実施、患者や家族への説明、必要時医師への報告を行うことになっていた。教員がコントロールルームから患者シミュレータを操作し、電話連絡を受ける医師役も担っていた。バイタルサインなどの状態を設定すると、心電図波形や血圧の値が室内の画面に明示されていた。教員がマイクを通して発語すると、患者の年齢に沿って声が変わられる仕組みになっており、高齢者のような声で患者からの訴えがされていた。教員は、患者への説明が乏しい学生には、患者の発言として「苦しい」と訴えるなどの工夫を行っていた。血糖測定後、医師に報告して指示を受け、インスリンを皮下注射する設定がされていた。教員は、注射前に手洗いがされているかなどチェックリストを用いて確認していた。終了後、インスリンのシリンジを持参することになっており、教員は薬液の量が正確であるか、エアが入っていないかなど基本的な技術の確認も行っていた。学生の行動は録画されており、終了後には別室に移動し、40名程度の学生が一緒にそのビデオを見ながら振り返り（ディブリーフィング）を行っていた。この演習では患者の状態が変化するため、状態を把握したうえでの適切な対応が求められる。そして症状に気づくことができるか、緊急の対応や判断ができるかなどがトレーニングされる。また、患者の身体的な面だけでなく患者や家族への声かけや医師への報告の仕方も振り返りの内容に含まれる。教員は、病名や症状を英語で語るなど、随所に英語での説明が含まれていた。教員が質問すると学生は自主的に返答し、ディスカッションが活発に行われていた。人数が少ないためか、学生と教員の距離が近く、質問をしやすい雰囲気であった。自分自身や他の学生の演習の様子を見て、お互いの改善点を確認することで、学習内容をより理解することが出来ると感じた。このような実践に沿った対処能力を身に付けることがフィジカルアセスメント能力の向上となり、臨床の場で生かすことができる実践力に繋がると感じた。

シミュレーションの授業と並行して、技術練習の授業が行われており、本学の学生は2人ずつに分かれて授業に参加した。本学学生も韓国学生の説明を受けながらモデルの腕に点滴用のサーフロー針を挿入し、固定する演習を体験した。本学の学生は戸惑いながらも、支援を受けて実施することができていた。終了後、短時間ではあったが韓国学生と授業などに関する意見交換ができていた。



写真3 シミュレーションが行われる演習室



写真4 注射技術のシミュレーション

### (3) シミュレーション授業参加による学生の学び

シミュレーションの授業で韓国の学生は、自らの観察や判断を基に患者家族への説明や医師への報告をしなければならず、本学の学生は韓国学生の主体的で積極的な行動に感銘を受けていた。シミュレーション後のディブリーフィングでも、韓国の学生が教員に指名されなくても積極的に発言している様子を見て驚くとともに、自身のやや消極的な授業態度を振り返り反省していた。これら授業への参加を通し、本学学生は帰国後、より積

極的に学習に臨む姿勢を取りたいと思いを新たにしていた。韓国の学生との会話の中で、技術練習を繰り返し行って技術を習得しているという話を聞き、本学の学生も、自ら技術練習を繰り返し行うことの重要性を実感していた。本学の学生は帰国後に実習を控えていたが、実習に向けて練習に励むことを誓っていた。

### 3. 施設訪問および韓国学生との交流，研修全体を通して得た学生の学び（学生の発言より）

#### (1) 保健所訪問

減塩食の献立見本にも毎食キムチが含まれているのを見て本学学生が質問したところ、キムチの量を減らすことや、摂取の中止はせず、低塩のキムチを選択する、水で洗うなどして食べるのが一般的であるとの説明を受けた。数々の工夫をしてキムチを毎食摂取することに本学学生は衝撃を受け、価値観の違いを感じていた。異なる価値観を持つ他者と関わることで、価値観の多様性を知ると同時にそれを尊重する姿勢の大切さを学ぶことができていた。

#### (2) 韓国学生との交流

韓国学生が語学に堪能であることや授業へ積極的に取り組んでいる様子を目の当たりにし、自身の未熟さに気づき、努力の必要性を認識していた。

#### (3) 研修全体を通しての学び

海外の看護に触れることで本学学生は多くの刺激を受け、自分の在り方を振り返るなど多くの学びを得ていたが、日本の看護の良い点も発見できていた。また、患者の前で誠実であること、品性を保つこと、謙虚であることなどの倫理観を持っていることにも改めて気づくことができていた。これまで習得してきた看護に自信を持ち、今後も維持向上していく意欲へとつなげることができていた。さらに、今後も継続して世界の状況へ目を向けることの重要性を実感していた。（写真5）



写真5 国際交流プログラム修了書授与

### 4. 教員の学び

シミュレーション授業の見学や演習に参加して、韓国学生が積極的に意見を述べ、活発に議論している様子が印象的であった。厚生労働省が設置した「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書<sup>4)</sup>」の、看護師教育における教育内容と方法でも、シミュレーション教育が効果的であることが述べられている。シミュレーション授業は、実際の臨床場面を取り上げて体験するため、状況下での問題解決型および看護に至る思考（臨床判断）のトレーニング、チーム連携の強化が可能となる<sup>5)</sup>。韓国の授業では看護技術の適切性や感染・安全管理だけでなく、家族への対応もチェックが行われていた。シミュレーション授業は、既習の学びを統合して実践する場にもなっていると感じた。また、演習後のディスカッションではデフリーファー（学習目的に基づき、学生の学びや発問や質問に基づいて支援する役割）の教員が学生の意見を集約し、不足点については学生へ問いかけを行い、学びが深まるように関わっていた。学生が効果的に学べるためには、学生の考えや行動の理由を引き出すためのスキルが必要であると感じた。学部教育の時から、より現場に近い判断ができる場を提供できるような工夫を検討していく必要性を実感した。

2017年1月、第4回学生交流プログラムにて韓国学生と教員が鹿児島大学を訪問した際に、両国教員によるセミナーと共催で今回の韓国研修報告会を行った。韓国を訪問した6名の学生は、当時の写真を多く盛り込んだパワーポイントを作成し、英語でのプレゼンテーションを実施した。参加者によるアンケートの結果から、報告会は他学生の国際交流への関心や意識を高める機会になったと考える。国際社会で活躍する能力を養えるように、国際交流を担当する教員のみならず、全教員が国際的視野を持ち、文化の違いを超えた教育ができる学習環境を取り入れること、十分な外国語能力が必要であることを実感することができた。

### 5. 今後の展望と課題

前述のように、韓国から学生と教員が来校時、セミナーを開催したが、今後は共同研究などにも取り組んでいくことで大学間の活性化につながることが期待される。本大学の「アジアや太平洋諸国との連携を深め、研究者や学生双方向交流および国際共同研究・教育を推進し、人類の福祉、世界平和の維持、地域環境の保全に貢献する」という憲章に基づき、広く展開していくためにも、他国の現状を理解し、外国語でディスカッションできるコミュニケーション能力を学生・教員ともに習得し、日本の看護の優れた点を伸ばしつつ、世界を意識した看護を実践していく能力を高めることが今後の課題である。

## 謝辞

施設訪問やシミュレーション授業・技術演習の見学や参加という貴重な機会をくださった韓国中央大学校赤十字看護大学の教職員，訪問施設のスタッフの方々に深く感謝いたします。

## 文献

- 1) 中尾優子，八代利香，津留見美里，他：鹿児島大学  
学生海外研修事業の報告（助産学コース大学院生） -  
韓国での産後ケアセンター，母乳育児支援センター  
訪問とプレゼンテーション体験．鹿児島大学医学  
部保健学科紀要2015；25（1）：19-24
- 2) 山口さおり，稲留直子，八代利香，他：学生海外研  
修における大学教員の役割と今後の課題．鹿児島大  
学医学部保健学科紀要2016；26（1）：73-81
- 3) OJO スキンリハビリテーションセンター  
<http://ojo0806.winko.net/base/eng/> November4.2016
- 4) 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会  
報告書  
[http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001vb6s-att/  
2r9852000001vbiu.pdf](http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001vb6s-att/2r9852000001vbiu.pdf)
- 5) 阿倍幸恵：看護のためのシミュレーション教育，第  
1版，医学書院，東京，2013，p61-63

## **Report on a student exchange trip to OJO(Oh junk ok)Skin Rehabilitation Center and attendance of a nursing simulation class at Red Cross College of Nursing at Chung-Ang University in Korea.**

Tomomi Masumitsu<sup>1)</sup>, Eri Ishibashi<sup>1)</sup>, Narumi Itou<sup>1)</sup>, Chika Saitou<sup>1)</sup>  
Waka Shimada<sup>1)</sup>, Yuki Fuse<sup>1)</sup>, Momo Matsugaki<sup>1)</sup>, Sachiko Shimizu<sup>1)</sup>

1) School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kagoshima University, 8-35-1  
Sakuragaoka, Kagoshima city, Kagoshima, 890-8544 Japan

Address correspondence to: Tomomi Masumitsu  
8-35-1 Sakuragaoka, Kagoshima 890-8544, JAPAN  
Phone/Fax: 099-275-6760  
E-mail: t-masu@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

### **Abstract**

Six nursing students from the School of Health Sciences of the Faculty of Medicine at Kagoshima University participated in the fourth student exchange trip to Red Cross College of Nursing at Chung-Ang University in Korea. During the exchange program, the students learned about the nursing profession through the training in the health and medical care facilities with local faculty and students. We herein report the outline of the study tour in Skin Rehabilitation Center and the simulation class that students deeply impressed with. We believe that this program allowed the students to gain insights into the importance of a global perspective as nursing profession.

**Key words:** Korea, international exchange, Nursing simulation class, skin rehabilitation center